

日本の児童文学—「声」の時代、「声」のわかれ

宮川 健郎

児童文学とそれを子どもに読んであげる「声」のかかわりを軸に、日本児童文学の歴史をふりかえり、現在の問題を考えます。

I 「聞くことのコップ」が満ちるまで

- ・ W・J・オング『声の文化と文字の文化』（桜井直文他訳、藤原書店、1991）

II 現代児童文学の成立と「声」のわかれ

- ・ 1950 年代の「童話伝統批判」の三つの問題意識、特に「散文性の獲得」について。
- ・ 詩的・象徴的なことばで心象風景を描く「近代童話」から、もっと散文的なことばで子どもをめぐる状況（社会といってもよい）を描く「現代児童文学」へ（1959 年）。現代児童文学の出発期の「理想主義」と、その変質（1980 年）。
- ・ 石井桃子の佐藤さとり『だれも知らない小さな国』批判（「子どもから学ぶこと」『母の友』1959 年 12 月）
- ・ 石井桃子と新美南吉「童話における物語性の喪失」（『早稲田大学新聞』1941 年 11 月）
- ・ 新美南吉（「私には紙の童話も口の童話も同じジャンルだと思われる。」）と巖谷小波

III 「声」をもとめて

- ・ 歌と呪文

石井睦美『すみれちゃん』（偕成社、2005）

竹下文子『ひらけ！なんきんまめ』（小峰書店、2008）

- ・ 語り手の「声」を意識させる。

市川宣子『きのうの夜、おとうさんがおそく帰った、そのわけは……』（ひさかたチャイルド、2010）

岡田淳『願いのかなうまがり角』（偕成社、2012）

参考

- ① 宮川健郎『現代児童文学の語るもの』（NHK ブックス、1996）
- ② 宮川健郎「子どもたちの未来案じる 児童文学作家・古田足日さんを悼む」（『秋田魁新報』2014 年 7 月 4 日）
- ③ 宮川健郎「近代的な視覚的世界 「佐藤さとり コロボックル物語展」を見て」（『しんぶん赤旗』2007 年 9 月 5 日）
- ④ 宮川健郎「「声」のわかれ—文体の二〇世紀—」（『日本児童文学』2000 年 9-10 月号）
- ⑤ 宮川健郎「「声」をもとめて—子どもが読むはじめての文学、その現在—」（『日本児童文学』2013 年 3-4 月号）